

埼玉スタイル

SAITAMA
STYLE

art center syu 2020 report

スタイル

SAITAMA
STYLE

みんなできくる

Saitama-style

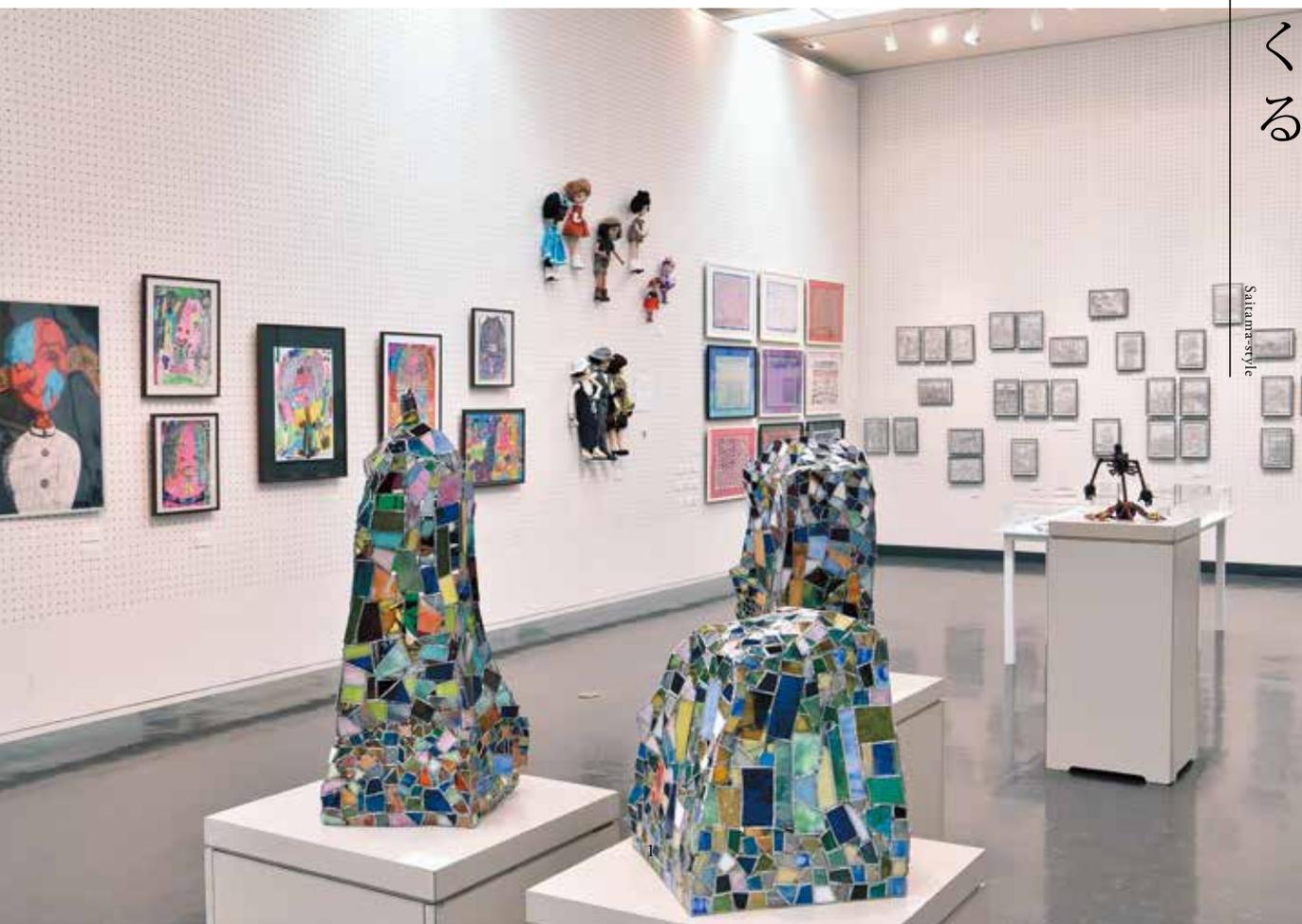
2020
2021

埼玉県障害者芸術文化活動
支援センター

アートセンター集

art center syu
2020 report

社会福祉法人
みぬま福祉会
Minuma Fukushikai



「令和2年度埼玉県障害者芸術文化活動普及支援事業」報告書

art center syu 2020 report

みんなでつくる スタイル 埼玉方式

社会福祉法人みぬま福祉会

もくじ

P

3

はじめに

P 4

埼玉方式 I 支援のあり方
日々の表現と向き合う

P 8

埼玉方式 II 研修会
支援のまなざしを育む

P 10

埼玉方式 III 選考会
多様な視点で語り合う

P 12

埼玉方式 IV 展覧会
アートのチカラで未来を創る

P 16

特集1 creation process
「みんなでつくる展覧会」ってなあに？

P 18

埼玉方式 V ダンス
新たな可能性を探求する

P 20

特集2 2020 review
コロナ禍を生きる。アートとともに

P 22

アートセンター集のご案内

P

はじめに

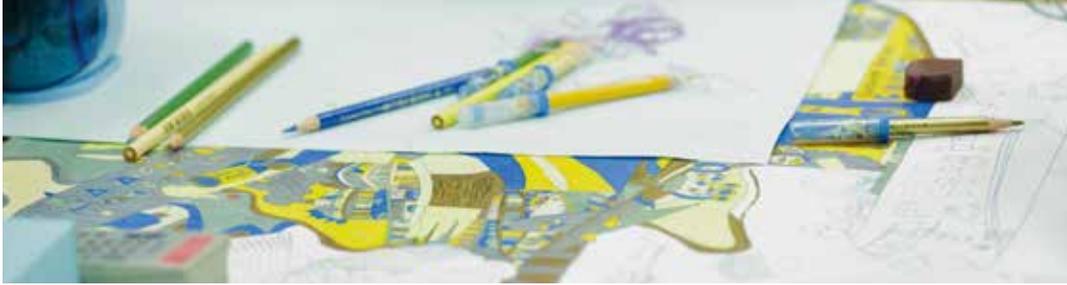
障害のある 人たちの “表現”を社会に 広げるために —

埼玉県障害者アートネットワーク TAMAP士〇(通称タマップ)では、様々な人たちがつながり活動しています。

福祉施設の職員たちが学びながら企画・運営する「埼玉県障害者アート企画展」や、美術の専門家と福祉施設の職員などが多様な視点を交えて選ぶ「作品選考会」、日常の行為から生まれた表現も広く発掘する、県の「表現活動状況調査」など独自の支援活動を通して、障害のある人も支える人も、専門家も行政も、ともに多様な表現の魅力を楽しみながらアートの可能性を探求しています。

この十数年をかけて県内で取り組んできた障害者芸術文化活動は、全国でも先進的な取り組み「埼玉方式」として注目を集めています。2016年には長年、表現活動を続けてきたみぬま福祉会・工房集(川口市)に、埼玉県障害者芸術文化活動支援センター「アートセンター集」を開きました。

本書では、2020年度の活動やコロナ禍での取り組みを報告するとともに、私たちが大切にしていることや改めて感じた想いをお伝えします。



埼玉方式 I 支援のあり方

🌸 日々の表現と向き合う

表現することは生きることそのもの。
その支援は福祉の延長にあり、その人らしく生きる日々の中で
周囲の理解と関わりにより育まれています。

Support

何のために誰のために

アートセンター集は、埼玉県障害者アートネットワークTAMAP土〇の活動拠点兼事務局として、毎年、県内における障害者芸術文化活動普及支援事業の活動計画を立て、相談事業や研修会、展覧会などを行っています。相談事業では、当事者だけでなく家族や支援者、「表現活動を始めたいが、何をすればいいの?」といった福祉施設などの相談にも応えています。

私たちは、障害のある人の表現を社会に生かすためには、支援者の育成が重要だと考えています。TAMAP土〇では、主要メンバーである福祉施設等の職員たちが、支援事業を通して「支援のあり方」を模索し、その学びを現場の支援につなげています。





障害のある人の表現は、決して特別なものではありません。誰もが持つ表現の源泉から生き生きと現れる個性が、多くの人の心を揺さぶりアートとして評価されています。その表現は、一人ひとりの日常から生み出されています。



困難や例外的な状況にある人を切り捨てない。
つないだ手を離さない姿勢は、人間の「よりよく生きたい」という当たり前の願いと共通して
個や集団を発達させる力になります。
他者の痛みに共感し、怒りや不安、
危機感を同じように感じる事が、できるかどうか。
仲間も家族も職員も一人ではありません。
多くの人と手をつなぎ、たくさんの力が合わさって、
きっと社会を変えていく力になるのです。



表現を仕事に

アートセンター集の母体であるみぬま福祉会では、その一人ひとりの日常を大切に表現や想いと向き合い、そこから生まれた作品を社会に発信してきました。どのような障害のある人も受け入れることを基本理念に、1994年頃、どの作業にも合わない重い障害のある仲間*と向き合い、その仕事を模索する中から表現活動が始まりました。当初は少人数の活動でしたが、共感してくれるアーティストなどの協力もあり、2002年にアトリエ、ギャラリー、カフェ、ショップを備えた工房集を開業。そして展示会を開き、表現がアートとして評価される経験を重ねることで、周囲の理解も得られるようになり、活動が広がっていきました。現在では11のアトリエを中心に、約150人の仲間が日々、表現活動を仕事として取り組んでいます。

支援事業では、その表現活動の場(5つのアトリエ)を巡る「アトリエ見学ツアー」も行っています。絵画や織物の制作ができない仲間でも、「これしかできない」ことから作品を生み出す、多彩な表現が共存する現場を見てもらい、表現活動には何が大切か、ともに支援のあり方を考えていきます。担当スタッフは仲間の成長やスタッフの関わり方、仲間同士の支え合いなどについて話し、仲間たちも自ら作品づくりへの想いを語り、カフェ運営に携わる家族にもカフェの役割や想いを語ってもらっています。

※私たちは施設利用者を「ともに働き・暮らし・地域をつくる仲間たち」との想いを込め「仲間」と呼んでいます。

2020 topics

atelier tour 2020/11/19, 2021/1/26, 1/28

新型コロナウイルスの感染拡大により見学会は中止になりましたが、相談に応じて、仲間たちがリモートで制作の様子を紹介したり、中学校のゲストティーチャーとして仲間が創作について語ったりする機会を得られたことで、支援についても、幅広い世代に考えてもらうことができました。



ゲスト ティーチャー

戸田市新曽中学校の美術の授業で作品鑑賞後、生徒さんからの質問や感想に作家の渡邊あやさんが丁寧に答えました。



リモートで アトリエ見学

他県の支援センターから特に重度障害の方への関わり方について学びたいのご希望があり対応しました。



TAMAP士〇定例会@アートセンター集

埼玉方式 II 研修会

🌸 支援のまなざしを育む

表現と向き合うことは、支援のまなざしを育むこと。
その魅力を探り語り合うことで、作者や表現に向けるまなざしが大きく変わります。

workshop

展覧会の実践

「埼玉県障害者アート企画展」では、長年、障害のある人の表現活動に携わっているアートディレクター中津川浩章さんのファシリテーションのもとで、福祉施設の職員たちが学びながら企画・運営を行っています。この研修では、単に展示手法を学ぶだけでなく、それぞれが支援のまなざしを育むことを大切にしています。その展覧会の実践で様々な表現や対話から得た気づきを、日々の支援につなげています。



グッズ研修 2020/6-12

表現や作者と社会や人をつなぐ商品化の中間支援をしている con*tio の杉千種さんと山口里佳さんが、主に福祉施設職員向けに毎年開催。何のための商品化なのかを考え、施設独自の商品開発や品質向上を行っています。



著作権研修 2021/2/18

弁護士の岩本憲武さん(モッキンバード法律事務所)が「権利保護に関するセミナー」で、作品や商品を守るために必要な権利や契約などについてわかりやすく解説。「こんな作品ってあり？」など現場に即した疑問にも答えています。



レクチャー 2020/7/16

毎年、企画展でキュレーションを担当している美術家の中津川浩章さんが、障害者アートと社会との関係性、展覧会や福祉的視点の意義などを解説した上で、展示作業の心得や基本についてレクチャーを行っています。

2020 topics

workshop 2020/6-2021/2

今年度の会議や研修は、主にリモートで実施。初めての施設も多く、事前に事務局がZoomの使い方などを説明しました。グッズ研修では、コロナ禍で販売機会が減っているため、ネットショップ等の相談が多く、工房集で始めたインターネットショップBASEの事例等を紹介。商品撮影のレクチャーなども行いました。





「本選考会」@埼玉県障害者交流センター

埼玉方式 III 選考会

多様な視点で語り合う

日常の表現の中にアート原石が隠れています。多様な視点を交えて新たな表現を発掘することで、アートの可能性が広がっています。



「ブラックがしゃりな丸」なお丸

selection meeting

「これってアート？」も発掘

埼玉では、2009年から県主導で毎年、障害のある人（福祉施設や事業所、支援学校、個人など）の芸術・文化活動の実態を把握する「表現活動状況調査」を実施しています。絵画や造形、ダンス、詩などのほか、作品かどうかわからない表現も含め、広く埼玉に眠るアートの原石を発掘している点が特徴です。「埼玉県障害者アート企画展」では、調査票（作品画像）をもとに作品選考を行っており、毎年、他に類を見ない多彩でユニークな出展作品がそろいます。また、その選考には、美術の専門家だけでなく福祉施設の職員をはじめ弁護士、行政職員なども参加して、様々な視点を交えてディスカッションしている点も大きな特徴です。

アートと福祉の視点が交錯

選考会ではまず、各自がキュレーターのつもりで作品を選び、それぞれ気になる作品について、どこが好きか、何が気になるのか、自由に意見を交わします。その発言から作品の魅力が見えてきたり、議論が深まったり……。作者を知る施設職員が、作品ができた様子や背景、作者のこだわりや障害特性などを語ることも多く、それが日頃、作品だけを見て評価している美術の専門家には、自身の判断や固定観念を揺るがす刺激に。また、施設職員にとっては、専門家の評価から作品を読み取る視点や感性を学び、自身の視点や感じたことを言葉にする機会になっています。そのアートと福祉の視点の交錯によって毎年、新たな発見や気づきが生まれ、またそこから「人間にとって表現とは何か」「何がアートなのか」を考える豊かな時間が生まれています。

2020 topics

selection meeting 2020/7/16, 8/1-20, 9/10

今年度は、586名の調査票から74名の出展作家を選出しました。選考では、感染予防を図りながらも「みんなでつくる」方針を進めていくために、段階的に行いました。各施設のミニ選考会には、これまで参加できなかった職員も加わり総勢130名で選考。例年以上に「みんなでつくる」選考となるなど、コロナ禍の対策により思わぬ成果も得られました。

- 1 調査票をデータ化し
選考委員に送付
- 2 選考レクチャーを行い
目的や意義を共有
- 3 各所で「ミニ選考会」を
開催
- 4 主要メンバーが「本選考会」
で最終選考

「本選考会」参加選考委員：中津川浩章（美術家、アートディレクター）、酒井道久（彫刻家、埼玉県立大学名誉教授）、前山裕司（新潟市美術館館長）、岩本憲武（弁護士/モッキンバード法律事務所）、山口里佳（コーディネーター/con*tio）、杉千種（同左）、埼玉県福祉部障害者福祉推進課2名、福祉施設職員32名



第11回埼玉県障害者アート企画展@埼玉県立近代美術館

埼玉方式Ⅳ 展覧会

✿ アートのチカラで未来を創る

人間にとってアートとは、表現とは、障害とは。
多様な表現で本質を問いながら社会に新たな価値を創造しています。



「ケビン」 斉藤 淳太

exhibition

問い続け変化をもたらす

埼玉県では、障害者の自立や社会参加の促進、多様性を認め合う社会の実現などを図る手段として、2009年から県や県内の福祉、美術、教育等の関係者・機関が連携して障害者アートの普及を推進しています。「埼玉県障害者アート企画展」は県主催で始まり、2016年から官民が一体となって継続しています。
毎年、多様な視点を交えて選考される出展作品には、緻密な描写の絵画、独創的なフィギュアなど、既に国内外で高く評価され個展が開かれている作家の作品から、それまで作品として発表されることのなかった日々の行為から生まれた造形や書きためられた言葉の蓄積まで、実に幅広い表現がそろう。

言葉でのコミュニケーションが難しい重い障害のある人の作品も多く、なぐり書きのような線描画や紙に穴が開くほど色を塗り重ねられた絵画、得体の知れない集積物などから、その表現の痕跡を辿り、作者にとっての表現の意味を探ることが、「表現とは何か」という本質を問うことにつながっています。選考会でも、表現を糸口に対話を深め、毎年、既存の美術の枠におさまらない、心動かされる新たな作品を発掘し、来場者とともに「障害のある人の表現の魅力とは何か」「その社会的価値や意義は何か」を考え、アートの可能性を社会に問う、埼玉独自の展覧会が生まれています。

また本展では、例年、出展作家が作品について語る「アーティストトーク」を行っています。作者本人をはじめ施設の担当者や家族が作品の生まれた背景やエピソード、創作への想いを話すことで、来場者がより深く、作者や表現を知る機会になっており、また、その交流が、作者と表現をさらに豊かに育み、周囲の意識にも変化をもたらしています。

第11回埼玉県障害者アート企画展

Coming Art 2020



「お人形」森 秋子



「富士山」長野 雅史





織り&グッズ展@工房集

2020 topics

exhibition 2020/12/2-6

開催については慎重に議論を重ね、会場での感染予防対策を徹底し、イベントはリモートに、アンケートはオンラインを活用するなどの対策を講じて、規模は縮小せずに開催。作品発表の機会が減少したコロナ禍、表現にも支援にも原動力となる貴重な機会になりました。

恒例のキュレーター中津川浩章さんと新潟市美術館館長前山裕司さんによる「ギャラリートーク」は、開催前日に無観客で行い、動画をYouTubeで配信。「アーティストトーク」は中止し、代わりにInstagramで作家を紹介しました。また、会場の作品を動画で配信。「作品集」もネットショップで販売するなど、来場しなくても多くの人が参加、交流できるよう努めました。

そのほか、埼玉独自の展覧会プロセス「みんなでつくる展覧会」のパネルを作成し、「支援のまなざしを育む」取り組みを紹介しました(関連記事 P16-17)。

オープニングセレモニー



ギャラリートーク(動画)



作家紹介(SNS)



TAMAP士〇参加団体の活動をInstagramで発信しています。

@tamap_saitama



展示作品紹介(動画)



グッズ展とワークショップ

企画展のほか、連動する展覧会も開催しています。毎年、グッズ研修の一環として開催している「織り&グッズ展」では、日々創作に励んでいる作家が来場者との対話から絵や書、詩などを創作する「ライブパフォーマンス」や、ステンドグラスなどの作家が講師を務める「ワークショップ」も行っています。

これらの多様な表現との出会いを育む展覧会を様々な人たちと共有することで、作者の自信や意欲はもとより施設の職員や仲間、家族など周囲の人たちも表現や作者に対する意識にも大きな変化がもたらされ、表現や支援の活動の輪が広がっています。

2020 topics

exhibition 2020/12/16-22

今年度は、改めて展示会のあり方を検討。出展商品を絞り、セレクトショップとして全体のバランスや見せ方を調整しました。展示の様子は、YouTubeで配信。また、工房集のネットショップでも販売し、作家紹介ブログを公開しました。アトリエとカフェがある工房集ギャラリーで開催することは、表現に触れ、交流することに意味があったのですが、今年度は、アトリエの開放は中止、カフェは開かず、ワークショップも縮小。団体の来場も調整するなど、密を避けての開催でした。しかし、多くの方が購入の目的を持って来下り、売上は過去最多を記録しました。



KOBO SYUチャンネルで配信も



ワークショップは最小限に



creation process

埼玉県障害者アートネットワーク TAMAP士〇
「埼玉県障害者アート企画展」 creation process

「みんなでつくる展覧会」ってなあに

「埼玉県障害者アート企画展」は、障害のある人の優れた作品だけを集めた展覧会ではありません。県内に眠るアートの種も発掘し、表現の魅力を探り、作者の想いと向き合うこと。そして、表現による感動や気づきを多くの人と分かち合い、社会に新たな価値を創造することを目指しています。そのプロセスを重ねることで、表現する人も支える人も見る人も、ともに成長し合う展覧会が生まれています。

あゆみ

2009

未来を見据え、官民協働でスタート!

障害者の作品の芸術性・創造性を正當に評価する環境を整えることで社会に新しい芸術観や価値観を創出できるのでは——との提言をもとに、行政、福祉、美術、教育等の機関が連携して県主催の「障害者アートフェスティバル」を開催。その一環で「埼玉県障害者アート企画展」が始まりました。また、県は「障害者がある方」の表現活動状況調査も開始。その調査票から出展作品を選ぶ方法も生まれました。



ひろがり
学び合える
仕組みづくり

2012

福祉施設職員たちが学びながら継続!

当初より支援者の育成に重点を置き、学生や福祉施設等の職員が学びながら運営するワークショップを導入。さらに実践的・持続的な活動を目指して、福祉施設等の職員たちが企画・選考・展示・運営まで一貫して行う方法へと移行していきました。

2016

つながりを礎に支援のネットワーク&拠点を発足!

展覧会の実践で培ったつながりを基盤に、国の助成を受けて「埼玉県障害者アートネットワーク TAMAP士〇」と「埼玉県障害者芸術文化活動支援センター アートセンター集」を発足しました。

2020

他県から注目される活動へと発展!

展覧会は、作者や仲間自信や意欲をもたらし、また、周囲の人々のまなざしや意識にも変化をもたらしてきました。それにより、活動はさらに深まり、広がり、全国でも先駆的な活動として注目を集めています。



ポイント

「埼玉県障害者アート企画展」の目指すもの!

表現の発掘・発信
障害者の自立と社会参加の機会創出

+

支援のまなざしを育む
表現を育む人づくり環境づくり

様々な人と成長し合う
協働共助のネットワークづくり



新たな価値創造

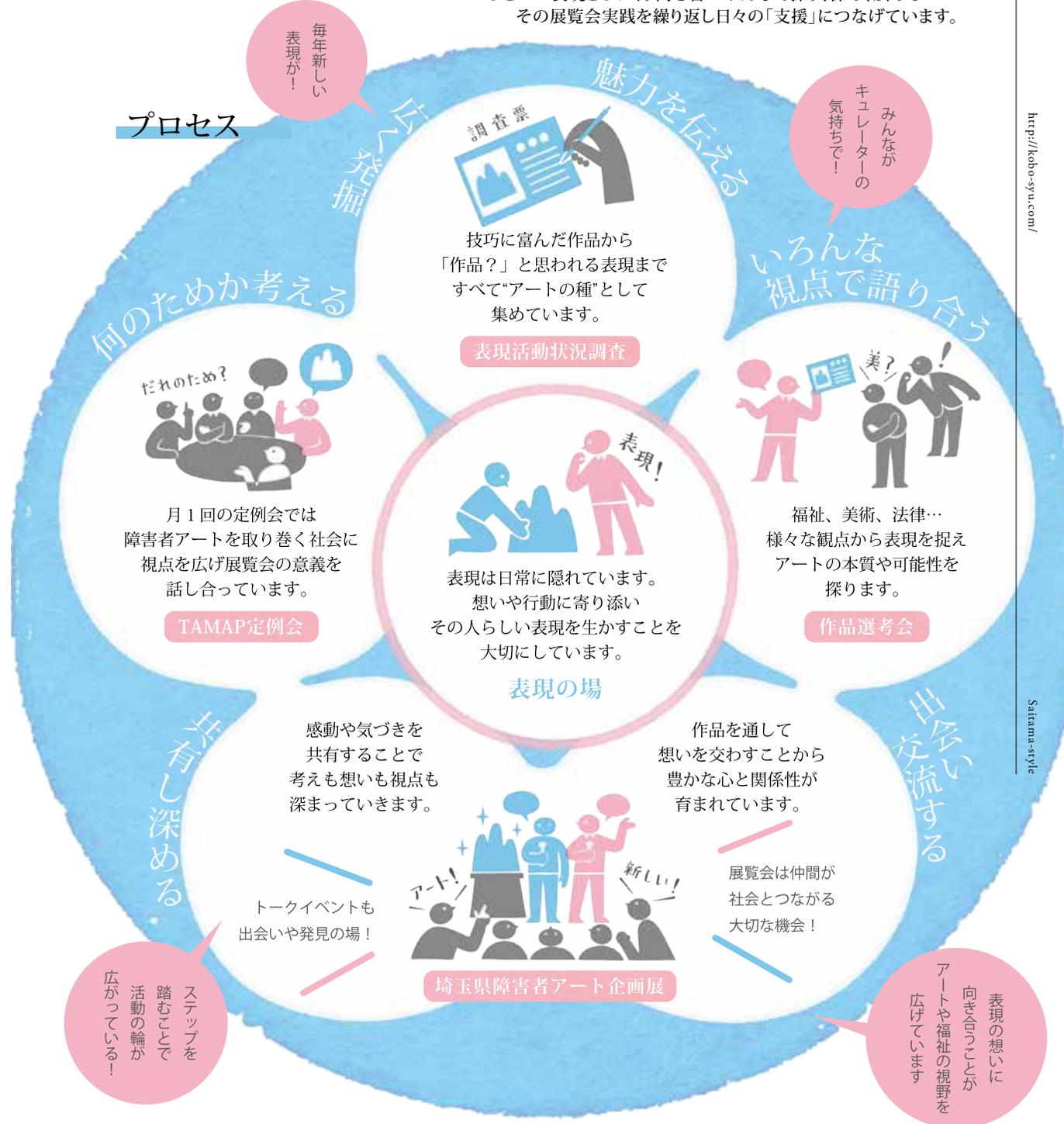
アートで未来をつくる

多様性を包括する社会づくり

ぐるぐるめぐり
支援のまなざしを育む
みんなでつくる展覧会

TAMAP士〇展覧会 process

一つひとつの表現とじっくり向き合いみんなで探り、深め、広める——
その展覧会実践を繰り返し日々の「支援」につなげています。





埼玉方式V ダンス

✿ 新たな可能性を探求する

だれもが輝きを秘めている。それが表現となり人の心を動かし、生きる力になっています。

Let's dance



舞台小道具
高谷 こずえ

それぞれの動き

美術以外の表現の発掘として、2017年度よりダンスワークショップを行っています。長年、県内で障害や年齢を超えた活動を続けているダンスグループ・ベストプレイスの主宰、竹中幸子さんを講師に招き、そのアプローチから身体表現における支援のあり方を学び、人材育成にもつなげています。また、公演する際は参加者以外の障害のある人たちもともに楽しめるよう、鑑賞支援にも重点をおいています。



ダンスワークショップ@埼玉県障害者交流センター

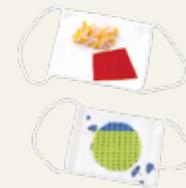


2020 topics

dance workshop 2020/8-2020/12

コロナ感染対策のため、参加者は限定して、公演に向けて8回のワークショップを行いました。メンバーにより生み出される様々な動きから構成を組み立て、また、織りやステンドグラスなど日ごろの表現(造形作品)を取り入れ、さらに、手づくりの衣装や小道具などメンバーの自発的なアイデアも取り入れながら、オリジナルのダンスプログラムをつくり上げていきました。障害の重さに関係なく参加でき、それぞれが新しい表現を模索できる環境の中で自信をつけ、同じ時間と場所を共有する仲間同士の成長も感じられました。

残念ながら1月に予定していた公演「跳べ! いっそ踊ってしまえ!」は、コロナ感染拡大により中止となりました。



衣装担当の片波見知代さんにより装飾されたマスク。ステンドグラスやフェルト地の鮮やかな色が印象的です。



納田裕加さんのオブジェ作品「のうだま」もダンスに参加しました。この「のうだま」をモチーフにしたプログラムも。

コロナ禍を生きる。アートとともに

年々参加施設数が増えている「埼玉県障害者アート企画展」。昨年度、無事に10周年を終えた後に待っていたのは、誰もが想像しなかった新型コロナウイルス感染症の世界的な大流行でした。展覧会やイベントの中止が相次いだり、「3密を避ける」という感染対策によって人と接する時間が失われたり、障害のある仲間たちにとって辛い状況が続きました。

このような状況で決断した、障害者アート企画展の開催。対策や工夫を重ねて無事に終えることができたことで、出展作家の皆さんはもちろん、出展しなかったまわりの仲間たちや、支援スタッフも大きな希望をいただきました。仲間たちの作品は、人とのつながり、人との関わり、共感、共有があり、自己肯定感の中で生まれています。日々の暮らしの中での思いや喜び、楽しみ、悩み、悲しみ、辛さ、怒り、苦しみなど、様々な内なる「想い」が表現

され、作品になっています。今、障害の重い仲間たちも日々力強く生きていることを、障害者アート企画展を介して伝えることができたと思っています。

毎年、開催する上で「今年らしさを付け加えなければ」と頭をひねっていましたが、「ただ開催する」ことだけでも大きな意義があることを、今年度の企画展で気づくことができました。やらないという選択は簡単ですが、仲間と社会をつなぐこの大切な機会を守っていくことの重要性を強く感じています。

埼玉県障害者芸術文化活動支援センター
アートセンター集 事務局



アンケートより TAMAP士〇 活動の振り返り

コロナ禍、福祉の現場はどこも過酷な状況でしたが、みんなの変わらぬ熱意により活動を継続できました。オンラインでの定例会や研修会では、「意見交換がしにくい」「気軽に相談し合えない」との声が多く、リモートによる交流の難しさを感じましたが、参加の自由度が高まり、「他の職員も参加できた」「活動を内部共有できた」との声も多く、かえって関係が密になったようにも思います。

感染対策を徹底して実施した本選考会や展覧会、ダンスワークショップでは、「実物を見たときの感動はいつも以上に大きかった」といった感想のように、多くの人が表現から得る感動や気づきの大きさを強く感じていたようです。展覧会でも、密を避けながら久しぶりに作品を鑑賞し交流できた喜びに溢れていました。「作品に勇気づけられた」といった来場者の声も多く、改めて障害のある人たちの表現が多くの感動と交流をもたらしていることを実感しました。

交流イベントの代わりに行った動画等の配信については、「施設で一緒に楽しめた」「本人の自信になった」という声がある一方、「実感がわからない」「ライブ感がなく寂しい」という声もあり、今後も作者や作品を囲んで交流を深める機会を大切にしたいと思いました。

今年度は活動を見直す機会にもなり、思い遣り助け合い学び合う、埼玉(TAMAP士〇)らしい緩やかな関係性が根を張り活動を支えていることにも気づかされました。



作家 関口 直子 さん

生まれつき発達障害のある私にとって、平均値であることが最も正しいという世界観の場所は合いませんでしたが、周りの皆様の優しさや熱意に触れることで、単一の視点でものを見てはならないことを教えていただきました。弱者救済の志を持つ皆様は、この世の光です。是非これからも、表現を模索する、障害を持つ方々の力になり続けて下さいませ。



埼玉県福祉部障害者福祉推進課長 村瀬 泰彦 さん

埼玉県障害者アート企画展は、平成21年に県がスタートさせ、10年以上経過しました。現在はTAMAP士〇の皆様と連携しながら、官民協働で一体となって運営しております。これこそが「埼玉方式」であり、非常に意義のあることだと感じています。

埼玉県では障害者の芸術文化活動の振興に取り組んでいますが、今年度は新型コロナウイルス感染拡大の影響によって障害のある方々の参加が難しく、中止となったイベントが沢山ありました。そうした中であって、この埼玉県障害者アート企画展を、多くの工夫を重ねて開催していただいたことは、価値のあることだと思います。

今回はYouTubeにてギャラリートークや作品紹介の動画配信にチャレンジし、コロナ禍という逆境の中でも、オンラインという新しい可能性を拓いていただきました。

埼玉県障害者アート企画展に展示されている作品はとも力強く、私自身も多くのメッセージを受け取りました。今後、障害者アートの魅力や素晴らしさをさらに広げていきたいと思っています。

作家 石井 章 さん

一年間、コロナウイルスで芸術界が大変な状況でも、教室やライブイベントをやることができました。埼玉県障害者アート企画展でも多くのお客様を楽しませることができて良かったです。今年(2021年)は企業様とのコラボや絵本も出したいと考えています。いつか健常者の方たちと一緒にイベントやライブで描いているところを見せる芸術ランドを作ってもらいたいと思っています。



美術家・キュレーター 中津川 浩章 さん

障害者アート企画展では、障害がある人の背景を考えながら、表現すること自体の意味やその魅力にフォーカスを当てています。福祉の現場では職員による励ましの声かけや日々の努力の積み重ねがあり、これらの継続が創作をより豊かなものにしていきます。コロナ禍の今は、アートも福祉も突き抜けた「人間が生きる」ということを考える、そんな展覧会になったと感じています。

コーディネーター・con*tio 杉 千種 さん

TAMAP士〇参加施設の作品が並ぶ「織り&グッズ展」は、今年度で5回目となりました。例年であればグッズ展に向けて改良を重ねますが、商品作りまでは気が回らなかったり、販売機会が減少したりと、力を入れづらいムードがありました。しかし、そんな今こそ商品やサポート体制を見つめ直し、日々生み出されるものへの愛着をもって、新たな展開を準備していける時なのではと考えています。

埼玉県障害者芸術文化活動支援センター

アートセンター集のご案内

障害のある人やその支援者の課題の解決や情報交換、ネットワークづくりなどの場として、2016年に厚生労働省「障害者の芸術活動支援モデル事業」の助成を得てオープンしました。2017年からは同省の、2018年からは埼玉県の「障害者芸術文化活動普及支援事業」の助成を受けて事業を行っています。

「集(しゅう)」という名前には、新しい社会や価値観を創るために

いろいろな人が集まっていこうという想いを込めています。

一人ひとりが豊かに生きることを大切にしています。

表現活動を通じて障害の有無に関係なく、人と人を豊かにつないでいきます。

ひろげるPlan 事業計画

「埼玉県障害者アート企画展」の開催を中心に、毎年連動する展覧会や研修等の支援事業を計画しています。

ささえるSupport 相談窓口

障害のある人やその家族、支援者の「創る」「深める」「広げる」「守る」をサポートしています。

例えば

- 作品を発表したい
- アート活動をはじめたい
- 支援の仕方がわからない
- 商品にしたいが著作権が心配 など

福祉、アート、教育、行政、司法などの専門家や専門機関と連携して対応しています。また企業等からの障害者アートの活用等の相談も受け付けています。どうぞお気軽にご相談ください。

電話：048-290-7355(平日10:00-17:00)

メールアドレス：kobo-syu@marble.ocn.ne.jp

※個人情報の保護を厳守し流用はいたしません。ご相談に応じるために関係者・機関と情報を共有する場合があります。ご了承の上、ご心配な点は遠慮なくお申し付けください。

これまでの活動報告やシンポジウムなどの記録、出展作品や今後の展覧会・研修会などの情報は、随時ホームページにアップしています。ぜひ、ご覧ください。

アートセンター集 <http://artcenter-syu.com/>



つなげるNetwork TAMAP士〇

埼玉県障害者アートネットワークTAMAP士〇は、障害者の表現活動を支援している県内の福祉施設・事業所、行政や様々な機関、美術・法律の専門家、作家や家族、地域の人人によるネットワークです。

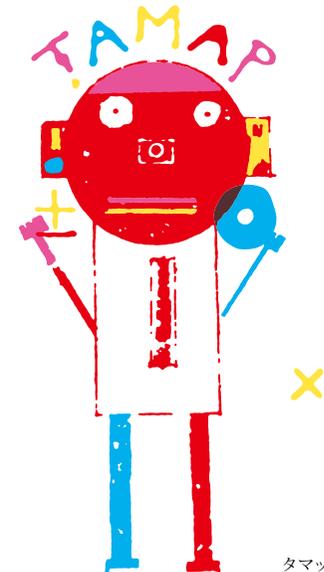
県内の福祉施設や事業所のメンバーが中心となり、様々な人たちとともに支援の輪を広げています。

「埼玉県は特にこれといって特色がないんです」と言ってしまうほど謙虚で控えめで県内の自慢が下手な県。でも良いところはたくさんある。そういったイメージを一言であらわすと…士〇。

埼玉県は「プラマイゼロだ」という障害のあるメンバーの意見に「埼玉をもっとアップ(向上)させたい」「県内のつながりをマッピングしよう」という想いをあわせて、埼玉県障害者アートネットワークTAMAP士〇(タマップ)と命名しました。謙虚で控え目な中に様々なものを良しとする懐の深さ(ごちゃまぜ上等!)を持ち合わせている。「そんな埼玉を盛り上げて行こう!」という想いを込めています。

月1回の定例会では、企画展などに向けた活動をしながら、支援の悩みを語り合ったり表現活動の情報交換をしたりしています。11団体から始まり2021年3月現在、30団体余りが参加。それぞれが地域などでも展覧会やイベントを開き、障害のある人の表現の普及に取り組んでいます。

みなさまのご参加をお待ちしています!



タマップくん

「令和2年度埼玉県障害者芸術文化活動普及支援事業」報告書

art center syu 2020 report

みんなでつくる 埼玉方式 スタイル

2021年3月1日発行

企画・編集・発行：社会福祉法人みぬま福祉会

埼玉県障害者芸術文化活動支援センター アートセンター集

〒333-0831 埼玉県川口市木曾呂1445(工房集内)

TEL 048-290-7355 FAX 048-290-7356

構成編集：武居 智子、con*tio、工房集

アートディレクション：水川 史生 (en design studio)

写真撮影：武藤 奈緒美、今井 紀彰、鈴木 広一郎、工房集

イラスト (p17図版内)：岸 潤一

デザイン・DTP：工房集デザイン室

題字・キャラクター(タマップくん) 図案：尾崎 翔悟 (工房集)

事業にご協力くださいました皆様、誠にありがとうございました。

© 社会福祉法人みぬま福祉会・埼玉県

※無断転載厳禁

art center syu*
SAITAMA
STYLE